

第8回 東近江市市民協働推進委員会 議事録

◆開催日時 平成25年3月27日(水) 19:30～21:30

◆開催場所 東近江市役所 東庁舎 東A会議室

◆出席者

市民協働推進委員 深尾昌峰(委員長)、森田初枝(副委員長)、北川久補、小倉昌和、上田祐子、楠神渉、端信子、北川陽子、川戸健一、井尻久嗣、土井正義、大林正平(欠席:河島修、廣田喜紀、井上泰夫)

市民協働推進連絡会議委員 田中浩、福井健次、久保文裕、村田淳子、三上俊昭、井口みゆき、高山幸生、(欠席:西澤静朗、藤井盛浩)

事務局 まちづくり推進課 黄地、山田、今村

支援コンサルタント (株) ジャパンインターナショナル総合研究所

◆議事

1. 開会

2. 委員長挨拶

3. 議題

(1) 第8回委員会の趣旨説明及び資料説明

(2) 協働の原則(東近江市の10の約束)について

(3) 具体的方策について

(4) その他

4. 閉会

◆傍聴人数 3名

◆会議録

1. 開会【市長挨拶】

2. 委員長挨拶

(委員長) これまで議論してきたように、市民が主体となってまちづくりをしていくところが、これから社会がどうなろうとも、基本であると思います。市民協働推進委員会で、非常に大事なことが議論されてきたと思います。今日は最終的な素材的なもののもとめということで、議論としてはほぼ最終段階に入ってきました。今日は皆さん方に宿題をしていただいたところも含めて、引き続きよろしくお願ひしたいと思います。

3. 議題

(1) 第8回委員会の趣旨説明及び資料説明

(ジャパン総研)

【資料1及び第8回東近江市市民協働推進委員会の趣旨について説明】

・第6回委員会と第7回委員会の意見を踏まえて、現状と課題を再度まとめている。

・黒点は第6回委員会以前に出された意見、丸印は第6回委員会での追加意見、二重丸は第7回委員会の追加意見となっています。

(委員長) 今日の作業は、前回までに、5ページまでのところで、かなりの意見が出ていますので、これを活かしていくというのが大前提です。この意見は、答申をまとめていくところできちんと位置付けていきます。7ページで、それぞれ重要だと思うことを投票結果のようにしてまとめて頂いています。便宜上、9つにまとめていただいています。これは、数が多いから大事ということでもないと思います。我々の総意として、こういう項目を意識していかなければいけないということだと思います。今は9つの約束とか、9つの原則という形で、8ページ以降にまとめていただいています。今日は、この9つでいいのかどうかを1つずつ見ていながら、足りないものがないかを出し合っていたらいいと思います。最終的には、私たちが大事にしていきたい協働の原則として、東近江バージョンの原則をきちんと明文化していきたいと思います。16ページに、具体的に答申の中で何を提案するのか、今まで皆さんに出していただいた、具体的な方策・施策を列挙させていただいています。中身の議論をすると時間が足りなくなりますので、こういった方策が考えられるのではないかと、もう少し幅広い議論をしていただいて、5月の段階では答申の取りまとめの案を、もう一度皆さんに検討していただくこととなります。今日は、実質的に中身を議論する最後になる可能性がありますので、少し突っ込んで見ていただければと思います。それでは、8ページのところで、まず1つずつ見ていきたいと思っています。

(2) 協働の原則（東近江市の10の約束）について

①地域愛を醸成する

(委員長) 「地域愛を醸成する」という項目です。5票入っています。協働やまちづくりを考えていく上で、基盤になるだろうという皆さんの姿勢だろうと思います。これは非常に素晴らしいと思います。こういう項目を最初に持ってこようということだと思うのですが、そういう意味では、まちづくりの基本としての、地元や地域というところを考えると、それを「愛」という言葉としています。この部分は、もう少し方策をイメージしてもらえるといいと思います。アイデアがあれば出していただければと思います。何かお気付きの点はありませんか。

(委員) 郷土愛の基になる、地域の文化・伝統・歴史などの、固有の地域の個性の認識が、共通している部分もあれば違う部分もあると思います。地域資源をもう一度みんなで掘り起こしながら議論して、もっと輝くようにすることが必要なのではないのでしょうか。

(委員長) 重要な指摘だと思います。地域を知らなければ、そもそも好きにもなれないし、分からないということだと思います。それは方策のほうにつながります。地域を知るとはとても大事です。そのきっかけとしては、学校教育や地域活動など、いろいろな角度から考えられます。

(委員) 地域には、そこで生まれた人と、仕事や学校の関係で来られた人がいますが、生涯のライフスタイルの中で、どの時点を中心にしたらいいのかによって、それに対する感覚も違ってきます。地域愛というのは、絶えず再生されていくようなイメージが大事であると思います。

(委員長) 大事な指摘だと思います。確かに地元愛とか郷土愛というと、長く住んでいる人のことをイメージしてしまいがちですが、そうではなく、転勤で来た人も、東近江のことを好きになる人がたくさんいるので、そういう人たちのよりどころや、そういう人たちとつながっていくということ、そういう人も共通した、ある意味のアイデンティティみたいなものを重ね合わせていけるようなイメージなのかもしれません。地域愛や郷土愛というのは、とても多様なのだと思います。そういう部分では、とてもいいキーワードをいただいたような気がします。

(委員) 地域とか地元とか郷土というのは、東近江を指しているのか、旧の五個荘を指しているのか、それぞれが思っている郷土の枠組みが全然違うのではないのでしょうか。東近江市で郷土愛、地元愛をつくり上げようとするのであれば、1つ柱がないとできません。どこを指すのかをまとめないと難しいと思います。

(委員長) 具体的な地域とは、ここを指すというような議論はしなくていいと思っています。協働の原則は、ある意味では大きい話なので、旧の五個荘みたいなまちの中でイメージして、そういう取り組みをされる方もいらっしゃるでしょうし、もっと小さい単位の活動で、こういうことをイメージしてくださる方もおられるでしょうし、東近江全体でと思う方、滋賀県全体の中で東近江からいろいろな発信が行われていく等、いろいろあると思います。逆に言えば、もう少しそういうことを丁寧に書き込んでもいいかもしれません。地域という捉え方は、ある意味ではレンジが広くて、多様で、人が持つイメージが相当違うだろうというご指摘だと思いますが、記述の中では、少し幅広い地域ということを使ったほうがいいかもしれません。

(委員) あまり大きい部分では難しいので、ボトムアップ的に、我々の住んでいる村とか、小さなところから、だんだん広げていったほうがいいと思います。普段の生活とか、環境、習慣の中で、郷土愛が醸成されてくると思うので、その中で、地域の相互扶助から絆が生まれて、文化ができてくるのではないかと思います。そこを中心にしながら、広げていって、東近江市を考えていったほうがいいのではないのでしょうか。

(委員長) 「生活」というキーワードはいいと思います。生活の範囲は人によって違うし、東近江市に働きに来ている人にとっても、そこで生まれ育った人にとっても、生活という言葉で表現できます。そういうイメージで、生活から見えてくることから地域やまちづくりのことを考えるということが大事だと思います。大体そこで皆さん方の共通認識をすることができるのでしょうか。地元とか、生活とか地域とか、そういう基盤だということと、文化、歴史みたいな、地域を知ることから始まっていくということと、多様な生活や多様なアイデンティティや、多様な地域愛があるということを前提に考えていくということと、合併後ということもあり、みんなでアイデンティティをつくっていかねばいけないということも含まれていると思います。ここはとても大きい話なので、置いておきたいと思います。

②対等な関係をつくる

(委員長) 「対等な関係をつくる」と、わざわざ書かなければならないということは、対等ではないのでしょうか。そういう側面があります。情報の出し方について前回盛り上がりました。行政は弱音を吐かないから、もう少し弱音を吐けばいいという話がありましたが、そういうのも含めて、対等な関係はどうやったらつくられるのか、何なのかということ

もう少し補足していただければと思いますし、対等な関係をつくるために何が必要かということだと思えます。対等な関係が、どうやったらできるのかということをもう少し言葉を豊かにしていきたいと思えます。何かお気付きの点があればお願いします。

(委員) 行政というのは組織です。また、普通、市民といえば個人です。行政という大きな組織に対して、個人は対等になりにくいという側面があると思えます。それを対等にするためには、市民が協働して、行政に対して、ものを言えるようなパワーを持つことが必要になってくると思えます。

(委員長) 市民間の協働みたいな話ですが、それは行政との対等性だけではなくても、みんな助け合っていくとか、この会議で何回も出てきたキーワードとして「自治」というキーワードがありますが、同じ思いを持っている人たちがつながり合うということだと思えます。そうすることによって、それを促していくための方策や支援が必要になってくるということです。他にいかがですか。

(委員) 行政と市民だけではなく、それぞれの団体も違いがあるので、まず、違いを理解していくことから始めていくことが必要だと思えます。

(委員長) 15 ページ、⑨に多様性を生かすとか認めるという部分がありますが、そこにも絡んでくるかもしれません。ここのところは、主体的なとか、行政が指導してする協働は少し違うという議論が下敷きにあるような気がします。いろいろな情報が役所の中にはありますが、それがなかなか市民と共有できないということで、そういう情報が共有できていけば、まちづくりがもっと進むとか、そういうインターフェースがつくりづらいということがあります。

(委員) 具体的なことですが、一時期、中間支援センターで仕事をしていましたが、市民と行政が対等な関係で協働していくのは難しかったです。市民の側も、どこに行政との引っ掛かりを求めて組んでいけばいいのか、そのスタンスが分かりにくい。その中間の組織として、支援センターが仲人的な役割になりました。この前、まちづくりネット東近江の話が出ていましたが、まちづくりネット東近江は、そういう意味での中間支援組織だと思います。そうすると、中間支援組織というのは、行政ばかりではなく、市民ばかりでもなく、その中間にあって、両方に協働の推進を促すような働きが大事だと思います。そういう組織は、市役所の中にならぬ方がいいと思っています。そういうことも含めて、協働を進めていくスタンス、この難しさはあると思えます。

(委員長) 合併前の役所との距離感の近さみたいなものと、合併後の距離感で、あえて対等と言わざるを得なくなってきたのかもしれない。今までの議論を思い返してみると、非常に近い中でやってこられたところは、こういう議論はあまり必要なかったように思えます。合併して、なかなか関係性が見えなくなってきたときに、こういう議論が出てくるというのは、行政と市民の距離感が影響しているのかもしれない。教科書的には、協働というのでは、対等性が一番に来るのですが、そういうことを少し踏まえた書き方とか、入れ方というのはあってもいいかもしれません。

(委員) 「対等」という言葉が引っ掛かります。多様性とか言いながら対等というのは少し違うように思えます。逆に④で、お互い理解するということがあるので、あえて「対等な関係」というのは、要らないのではないのでしょうか。

(委員) 私もそう思います。行政なり市民の強みを生かしながら、逆に補完し合うような、常に対等であるという感じは持っています。特に、合併で地域が見えない状況になってき

てしまっているの、行政と住民が協働でやろうとするのが難しい状況が生まれてきているのではないのでしょうか。その状況を知らない人が入り込んでくるということもあると思います。

(委員長) あえて「対等」という言葉をやめようというのは、いい提案だと思います。実は、教科書的に「対等」という言葉が出てくるわけです。全国的にもそうであると思います。ただ、あえてその言葉がないほうがいいというのは、大事な議論だと思います。合併を挟んで、今の地域社会を見たときに、逆に「距離感」とか、今までの地域の捉え方みたいなものを市民のほうがよく感じられたり、生活の中で捉えられたりするようなものを補完していきましようというお話だったと思いますが、そのほうがいいような気がします。

④の「お互いを理解する」というところに、対等性みたいなニュアンスは収れんさせたらどうかという、いい提案だと思います。どうでしょうか。

(委員) 合併後は、支所に来られる職員の方が、地域のことを知らないこともあります。それでつながらない。例を挙げると、グリーン近江でも大きく1つになって、最初は全然地域を知らない方が来られて、農家とのつながりがなくなりました。今は元に戻りました。

(委員長) 今、言われたことは、ある意味当たり前のことですが、行政の仕組みでは、当たり前のことが当たり前できないこともあります。それを当たり前にしようという提案は大事だと思います。その地域で育った人たちをできるだけその地域に張り付けて、その中で異動していくという取り組みはできると思います。今までの意見では、「対等」というのはあえて消して、「お互いに理解する」というところに持っていこうという提案です。いかがでしょうか。反対がなければそれでいきたいと思います。今の論旨をきちんと書ければ、非常にいい項目になると思います。役所が勝手に物事を決めて、市民に対してこれをやりなさいというような関係性はよくないわけです。一緒にやるのであれば、一緒に議論したり、考えたり、情報をシェアすることも大事です。そういうニュアンスも含めて、お互いを理解するためには、情報の共有や、場が必要だということになります。それは④でまた議論したいと思います。「対等な関係」ということは、あえて項目としては言わないこととします。

③責任を持つ

(委員長) タイトルに何かいい言葉はないですか。

(委員) 責任を持つというのは教科書的だと思います。役割とかやりがいとか、自発的に、ということが出てきているので、責任でもあるけれども、何か言葉としてどうかと思います。

(委員長) ここで書かれている幅の広いことが、なかなか伝わりにくい。

(委員) 行政の場合は、税金を使うことにおいて責任を持たされていると思います。その意味では、行政は責任を持って仕事をされていると思いますが、まちづくりということになると、民間は少しニュアンスが違ってくると思います。役割とかそういうことになってくるのではないのでしょうか。

(委員長) タイトルとしては、そういうニュアンスのほうがいいのではないのでしょうか。行政責任できちんとやらなければいけないもの、特に権力を行使しなければやれないことは当然あるので、きちんと責任を持ってやってくださいという言葉は、本文中にあっているのですが、タイトルとしてはどうかと思います。

(委員) みんなに役割があるということではないでしょうか。

(委員) できることをするというニュアンスが、民間の場合、一番大事だと思います。

(委員) 難しいことではなく、小さな事でも、何かできることで関わりたいということですね。

(委員長) ここはあまり中身の決め打ちをする必要はないですね。ここで言っているのは、市民にしかできないものがあって、それは大事だということです。「責任を持つ」という強いタイトルがいいという方はいませんか。

(委員) 責任を持つというのはきついです。普段、いろいろな地域で活動していますが、やはり責任はあります。それぞれの役割を持って、それをきちんと成し遂げるという責任感はあると思いますが、責任を持つと言われると、少しきつい感じを受けます。

(委員) 最初に郷土愛とか、愛ということを持ってきましたが、愛というのは、「すべき」とか、そういうことではないと思います。そうしたいと思うことから自発的に生まれてくるものだと思います。それがまちづくりです。行政はそうではなく、ある程度、役割を与えられた責任があって、公平性と合理性、そういった組織原理というものが、行政と一般の団体では違うと思います。

(委員長) 市民の強みと行政の強みを生かし合うというニュアンスです。それぞれ立ち位置が違うので、やれることが違います。責任の果たし方も違います。

(委員) 「市民がやれること、市がやるべきこと」ではどうでしょうか。

(委員長) 今のニュアンスでよろしいですか。ニュアンスは伝わったと思うので、ジャパン総研さんに再検討をお願いしたいと思います。

(ジャパン総研) ここの概念は、かなりいろいろなものを含んでいるので悩みました。大きく、この内容をまとめた表現ですと、市民にできることは市民で、行政にできることは行政でという感じでまとめていました。言葉の概念を全部統一してまとめようということ、で、「責任」という表現になりました。

(委員長) もう少し融合的な要素もあったほうがいいです。市民ができることは市民で、行政ができることは行政で、だけじゃない。

(委員) 行政に対しては責任を持つと言っても、市民に対して、協働について責任を持つと言われると、少しつらいし、重いというイメージがあります。

(ジャパン総研) 地域コミュニティの醸成もこの項目に入っているのですが、地域が今の段階では、ある意味、地域が本来担わなければいけないということに対しての、気づきを与えられていないという意見も入っていました。

(委員長) 自分たちの地域を自分たちで守っていくという、ある意味での責務として、項目としてはあっていいと思います。しかし、タイトルとしてはきついです。今の議論で、中身も相当触れていただいたような気がします。こういう項目でまとめていきますということでもよろしいですか。

④お互いを理解する

(委員長) 行政と市民の相互理解だけではないということが大事です。市民同士もそうだし、企業と市民の間もそうです。住民間、団体間でもそうです。

(委員) 「三方よし研究会」という医療連携ネットワークについての活動で、4年間にわたって一番大切にされているのが、顔と顔が見える関係です。協働でも、顔が見える関係が

大切なのではないかと思います。

(委員長) 先ほどの議論の、距離感の問題とつながることだと思います。そういう関係性みたいなものが非常に大事だということで、その辺につながってくると思います。

⑤目的を共有する

(委員長) 一般的には、目的を共有するというのは、行政事業を市民が担う型の協働のときは、行政と市民が事業の目標を共有して、一緒にそこに向かって走りましょうという言い方になります。それはそれでいいのですが、そうでないもの、例えば、協働の中には、生活をしている人たちから発せられるメッセージやビジョンというものもあると思います。一方通行のビジョンを押し付けられるということだけではなく、住民からのメッセージやビジョンをどう共有し、どう広げていくかということも、ニュアンスとしてはあったほうがいいと思います。それぞれの役割を果たすためには、何か共有していかないといけない。

(委員) お互いを理解するということで、顔が見える関係が大事です。顔が見えるネットワークが非常に重要だと思います。

(委員長) 他にいかがですか。

(委員) 東近江市社協で、地域福祉活動計画をつくっています。社協の一方的な計画ではなく、まず、市内の14地区ごとに、住民ができる福祉活動を計画して、それをベースにしています。平田地区では、あいさつ運動が浸透していて、みんなが一緒になって、協働してやっています。地区ごとに住民同士が共有し合えたら、すごく大きな力になると思います。

(委員長) ものすごく大きなヒントがあると思います。地区ごとに議論して深まったり、共有できたりするという今の事例は、いろいろな形で応用できると思います。そういう場をどういう主体がどうつくるか。福祉だったら社協が音頭を取ってやれるかもしれないし、いろんな存在がプロデュースできるはずです。目的を共有するとか、課題を共有するところの、共有の仕方とか、やり方を共有するとか、目指す、というニュアンスでいくと、今の社協の取り組みは非常にヒントがいっぱいあると思います。そういうことを少しイメージして、何のために自分たちは、まちに関わるのかみたいなことを入れると、もう少し東近江らしい一体感が出ると思います。

(事務局) 目的を共有するというのはよく分かります。私が、市民の立場で、ある行政と協働事業をしたときに、行政の予算でつくったものだから、その成果は行政のものだと言われたことがあります。目的・課題・プロセスを共有することに加えて、成果も共有すべきではないかと思います。

⑥住民が参画できる場をつくる

(委員長) もう少し表現を豊かにできるような気がします、いかがでしょうか。

(委員) 住民だけではなく、行政も含むのではないのでしょうか。

(委員) こういう書き方をすると、行政が「できる場」をつくらなければならないということになります。

(委員長) ボランティア団体や市民活動団体とか、市民側の責務かもしれません。いろんな人を巻き込んだり、楽しさを分かち合ったり、住民の自治活動やまちづくり活動に参加するチャンスを与えられるのは行政だけではありません。そういうニュアンスが出てくる

といいと思います。積極的に市民同士が参加し合えたり、支え合えたりする、参加する権利を保障できるということは大事かもしれません。その中に行政職員の人たちがどんどん入って行って、一人の市民として関わっていただくのは、当然、大事だと思います。

(委員) 市民としてだけではなく、行政職員として参加しながら、お互いの違いをもっと議論したり、分かり合ったりという、そういう意味での出会いもあるかもしれません。

(委員長) 「お互いを理解する」のところに、そのニュアンスを入れましょう。ここはどちらかという、場をつくる、場を開くというニュアンスが強いように思います。

(委員) 役割分担というと、行政はお金がないし、できないことは市民でやるというように捉えられると思いますが、そうではなく、地域の課題から目指すべき姿を見つけたら、その力を最大限に発揮するのが公の役割だと思います。市民活動に行政が協働として関わる場が、そういうところでたくさんできるのではないかと思います。

(委員長) そういう場が大事だということですね。活動の現場というよりも、地域の総力戦みたいな話です。それぞれの立ち位置が違う中でも、できることはたくさんあるので、それを最大化していくことで、みんなハッピーになろうという話だと思うので、今の議論は大事です。皆さんの議論は、今まで語られてきた協働から、もっと進んだ議論になっていると思います。場を少し豊かに書きましょうということで、今のニュアンスを少し生かせたらと思います。

⑦担い手を育成する

(委員長) いかがでしょうか。参画の場を豊かにすれば、そういうチャンスが広がるという捉え方をすると、担い手は居るはずです。それをあえて、地域社会を生かし切れていないと捉える考え方もあるかもしれません。今までは、担い手やリーダーを育成することをやってきましたが、成果が出ないのはよく分かっています。リーダーの養成講座を受けたからといって、育つものではないことは経験として分かっているはずです。「育成する」みたいな、今までの言い方ではなく、地域にあるものをどう引き出してくるか、力を生かすかとか、もともとあると信じたほうが良いような気がします。

(委員) そういう人たちを育むための環境づくりではどうでしょうか。

(委員長) 育児中のお母さんが出やすいような、何かの手だてがあれば、会議にも参加できるかもしれません。どこに行っても同じメンバーで同じ議論をして、まちづくりをするのは、本当に一握りの人たちによるものになっているのではないかという反省はあります。理想論かもしれませんが、そこを変えていくような言い方のほうが良いような気がします。

(委員) 私もそう思います。高齢者に潜在的にケアの知識を持っている方がいらっしゃるので、育成というよりは発掘というイメージのほうが良いと思います。私たちも、たまたま、シニア世代の地域デビューを支援するような講座を3年ほどしました。社協も今、されていると思います。なかなか難しいところもあるようで、1～2年目くらいはうまくいくのですが、3年目くらいになると、少しマンネリ化するので、目先を変えて、いろんな活動家を集めたりしました。興味を持ってくださるまでに少し火を付けると、たちまち生き生きして、まちづくりの実施員になってくださるので、そういう火の付け方を考えたらいいと思います。

(委員長) そういうニュアンスで表現を直してください。小学校の教員をしている私の友人が、モンスターペアレンツの問題で悩んでいました。1年間、対話をしてきたら、最近

はそのお母さんが、学校に一番協力的になったそうです。何がお母さんをそう駆り立てていたのか、それを理解して、議論して、みんなで共有したら、分かってもらえた瞬間から、お母さんが変わってきたそうです。担い手がないということではなく、そういう人たちがいて、そういう人たちと周波数を合わせる努力をすればいいのかもしれない。育成的な要素でいくと、いろいろな地域活動をしている人たちに開いてもいいような、行政の職員研修の講座はありませんか。京都市では、ファシリテーションの講座を行政職員だけでなく、地域で活動している人にも開いています。そういうものを開ければ、あえてやらなくても使えるものがあるかもしれないと思います。

(委員) 去年、研修の担当をしていましたが、行政職員に対しても、まだあまりファシリテーションの研修は行っていません。しかし、必要性はすごく感じています。

(委員長) お互いが学び合う。お互い必要だったら一緒にやったらいいですね。

(ジャパン総研) 私は、愛知県の豊田市で、住民とのパートナーシップ系の研修を、住民と行政の職員とで、政策課題を検討していくスタイルでやっています。岐阜県でもやっています。かなりメジャーなやり方になっていると思います。

(委員) 八日市図書館で職員研修をされた際に、たまたま内容が高齢者関係で、私たちのNPO法人にも一緒に来ないかということで声を掛けていただいたことがあります。

(委員長) そういうことは実際、まちでは起こっています。もう少しそういうのがイメージできると、みんなで高め合いましょとか、情報やノウハウを共有しましょとか、あえて、担い手を育成するみたいな観点でいくと、そういうことが入ってくると思います。

(委員) 市役所の研修を住民に呼びかける場合、誰に呼びかけていくのでしょうか。

(委員長) それは発信の悩みですね。今までの自治とか統治は、自治会長さんを通じての情報網だったわけです。そういう回路を多様に持つという、情報発信のところで言われたことですが、それをどうつくっていくかということ自体がチャレンジなのでしょう。研修については、もう少し違う回路があれば、本当に一緒に勉強したいという人に届くと思いますが、そういう人たちに情報を届けるのは、非常に難しいです。

(委員) 自治会長は本当によく勉強しています。地域コミュニティセンターが、まち協さんに指定管理という形になり、まちづくりをされていますが、まち協さん自体が地域の認知度が低いので、どうしても、まち協さんと連合自治会が一体的に事業を展開していかないといけません。ある部分では、今まで以上に、地域のまちづくりについて、防災にしる、地域コミュニティにしる、今の自治会長はものすごく勉強しています。本当に熱心ですので、もっとやってもらったほうがいいと思います。

(委員長) そういう意味では、自治会長さんの立ち位置は大きく変わり始めていますので、そういう像がどんどん発信されていくと、自治会長になりたい人が増えていくような気はします。

(委員) 自治会長が若くなってきています。そういう人たちに地域の中心的な役割を担ってもらうことで、協働がまた変わってくると思います。

(委員長) 東近江全体的にそうなのですか。

(委員) そうですね。

(委員) 以前は、二度も三度も同じ人が自治会長になっていました。最近は同じ人にならないように制限を設けているところもあります。

(委員長) それはポジティブな作用なのですか。研修の話とか、地域でいろいろな形で人

をつないだり、発掘したり、担い手は居るという前提で、ないものをねだるのではなく、あるものを磨く、気づいていない力とか、担い手論はこういうニュアンスで少し整理をしてください。

(委員) 人材育成というよりも人づくり的な部分があると思います。行政でも「東近江人づくりプラン」というものをやっています。大人は「三つの『わ』づくり」ということで、人づくりプランを進めておられます。根底にある人づくりをした上で、担い手の人材育成かなど、そういうものが根底にあるような感じを受けます。

(委員長) そういう機会をうまく活用していきましょうということですね。そういうところに触れていきたい。

⑧連携する。つながりをつくる

(委員長) いかがでしょうか。

(委員) 先ほどの話とつながってくると思います。職員の研修の話から、もっと多くの市民を巻き込んだ研修という話になっていりましたが、私は、この会の第1回のときに、官民交流研修会というのを提案させていただきました。そういうことが、あちこちの市で、全国的には出てきています。行政とまちづくりを自発的に進めている人たちと交流し、共に同じ立場で議論をしながら意識を深めていけるように、もう1歩踏み出すために、何が足りないのか、何が必要なかを考えています。

(委員長) 連携する、つながりをつくるみたいなどころでいくと、あまり企業の姿が見えてきません。まちづくりをすることで、自分たちの商売が活性化するみたいな文脈で捉えていったほうが、事業者としてはいいと思います。事業者と自治体や市民という関係性について、新しいフレーズとか、事業者の立場からキーワードになる言葉はないですか。

(委員) 顔が見えるという部分がキーワードになってくると思います。向こうの顔を探しながら、商品開発や、商品に発展していく素材をつくってもらうというのは、やっていることだと思うので、そこがキーワードになると私も思います。

(委員長) 結構、東近江には経済団体とか、いろんな会があると思いますが、市民団体やボランティア団体の人たちと一緒に何かやるということはあるのですか。

(委員) たくさんはありません。事業をやっていく中で育っていくという形だと思います。逆に研修をやっていくほうがリスクだと思います。失敗をしたときに、地域から温かく見守っていただけるというのがあれば、もっと若い人たちも挑んでいけるとと思います。そこは、まちの豊かさにつながっていくと思います。

(委員) 昨日、奥永源寺のほうで、奥永源寺の仲間たちということで、奥永源寺の集落の振興をやっておられる団体や、工芸作家、県立大で茶レン茶”一という活動をされている方、あるいは、びわこ学院大学で着地型観光に協力していただいている方が集まって、自分たちがやっている活動を紹介しようということで、そういう場を行政が動ける形で持ちました。それぞれやっているけれども、行政もばらばらの中でやっている中で、地域として見えていないということで、一度集まってもらって、それをつなげてみたいと思っています。行政がつなぎ役をするのか、どこがするのかは今後の課題であると思いますが、行政の中でも横に串を刺すのは大事だと思います。

(委員長) 誰がやるかは別にしても、そういうつながる場は必要です。今までのつなげ方、特に行政がやるものと違うものがあったらいいのではないかというご提案とも取れました。

いろいろな人たちがやったらいいと思います。自治体ベースで交流の場をつくと、普段から会っている人たちが、わざわざ時間をつくって交流しているということで、交流になりません。そういう意味では、実質的なつながりのある場をつくりましょうという話だと思います。

⑨多様性を活かす

(委員長) いかがでしょうか。

(委員) まちづくりで、この部分が一番大事だと思います。私も、退職して何かすることはないかということで、いろいろやっていますが、人に言われて初めて、自分にできることに気づき始めました。他人に言われて初めて分かる、その場があまりないような気がします。そういう場が大事だと思います。

(委員長) おだてる人や頼む人がまちの中にどれだけいるか、ということだと思います。

(委員) 気づきが大事ということで、普段から今の生活に満足しているという部分においては、今の生活を維持するところが多いと思います。こういうことをしなければと思うと、一大事業のように思ってしまう。普段からしていることが、他から見るとすごいことかもしれないので、そういうことを考えてみたらいいと思います。みんなのために使う時間があると、違った自分自身を発見できることがあると思うので、人任せにならずに、自分のことも含めて、他の方のことも考えながらできるような、自分磨きをする必要があると思います。

(委員長) 表現としては「多様性を活かす」なのでしょう。ここに書いてあることは、力を生かすというニュアンスに見えます。多様性を活かすというのは、「お互いを理解する」みたいなところに収れんしてもいいのかなという気はします。自分の持っている力は、当たり前すぎて気付かれません。主婦の方が、自分は何もできないけれども、ボランティアをしたいということで来られたのですが、作業所で調理をしてもらったら、みんながおいしいと喜んでくれました。主婦としては料理をすることは当たり前のことですが、それが社会とつながると喜んでもらえます。そういうことを、まちとして、どう生かし合うか、先ほどの話とつながってきますが、ここはやはり、多様性というニュアンスが強いですか。

(委員) できることに気付いてあげることが入っていたほうが、分かりやすいと思います。

(委員) できることに気付いて、見つけてあげること、褒めるということが、ここに入っていたほうがいいと思います。

(委員長) 担い手論のところとも重なるし、多様性、住民参画とも重なっているような気がします。潜在的、顕在的の両方、それぞれできることがあって、それが、生き方とか自己肯定感につながっていくような大きい話にもなっていきます。多様性という、いろんな価値があるというニュアンスでは少し違うので、多様な力とか、市民が持っている力、企業が持っている力、まちにある力という、そういうものを引き出したり、生かしたりするような環境や場や関係性、そういうものを総じて言っているような気がしますので、ここは、この項目として残すか、もしくは、少し全体を見たときに、もう少し落とし込めるところがあるような気もしなくもないし、あえてきちんと言ったほうが、収まりがいいかもしれません。もしくは、この項目を1つ立てて、他から引っ張り出してきたほうがいいということもあるような気がします。

(委員)最後のところに、「新たな発想」という言葉があります。異業種交流でもそうだと思いますが、違う能力とか分野の人と接することによって刺激を受けて、新たな発想、新しいものが生まれてくるという、そのようなニュアンスもあると思います。

(委員長)それは大事です。協働は、同質化するとあまり意味がありません。この委員会では、皆さん方の意見をベースに組み立てていくということで、初期のワークショップも含めて、相当な時間を費やしてきました。これだけ意見が出るというのは、積み上げの力があると感じますし、そうやってまとめていくという挑戦もしていて、非常に心強く思っています。今日は、具体的方策のほうもなぞればと思っておりましたが、私の進行の仕方が悪く、時間的に無理です。今日の議論の中でも、具体的方策の話がかなり出てきていますので、それも含めて、今までの議論やワークショップの中で出てきた具体的方策と、今日の議論で出てきた具体的方策を整理させていただいて、次回の答申の原案のところで、もう一度、皆さん方と確認をしたいと思います。次回は事前に原案を送りますので、全体を通してチェックしていただいて、抜けているところや重複しているところ、もう少し整理をしたほうが良いところなど、メモをしてきていただきたいと思います。次回は、具体的方策も含めて、一応、われわれの委員会として出す原案を取りまとめたいと思います。ぜひ、そういう形でご協力をいただければと思います。

(3) 具体的方策について

(時間の都合で割愛)

(4) その他

(事務局) 具体的な方策について、16 ページに、ワークショップでいただいた意見をまとめています。この委員会では、現状と課題について、かなり時間を費やしていただき、その中で、現状と課題の対応策として、かなりたくさんの方の意見やアイデアをいただいておりますので、そういったものを取りまとめて、一度、形にしていきたいと思っております。その結果を5月の上旬にはお送りしますので、事前に目を通していただきたいと思います。次回は、5月21日(火)、19時30分からお願いしたいと思います。

4. 閉会

(委員長) 市長が代わられたということもありますし、この委員会の役割や、今回出すものは、非常に重たいし、きちんと根付かせなければいけないということがありますので、答申に関してはラストスパートになります。よろしくお祈りします。

(事務局) 長い時間、ご議論いただきまして、本当にありがとうございました。これもちまして、第8回の委員会を終わらせていただきたいと思います。